

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月25日現在

機関番号：34520

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720062

研究課題名（和文） 中国における音楽興行の空間演出に関する研究

研究課題名（英文） The study of Spatial presentation in China

研究代表者

渡邊 哲意（WATANABE TETUI）

宝塚大学・東京メディア・コンテンツ学部・准教授

研究者番号：00412073

研究成果の概要（和文）：日本と比較して中国国内におけるロックミュージックの浸透具合と観衆のライブ空間に対する印象と要求の違いが明らかになった。公演の機会が増えることで観衆の空間表現に対する意識は活性化しつつあり、より音楽的、感性的な表現方法への要求が高まることが予想される。観衆意識の発展は音楽表現と空間表現双方を複合化した総合演出としての熟成を設備と観衆共に進める必要があり、今回の研究はその演出方法の方向性を示すものとなった。

研究成果の概要（英文）：The studies showed that differences of impression and demand become clear between China and Japan; especially for permeation of rock music and space design. As music performances grow in China, their consciousness of spatial presentation would be stimulated. Consequently, they would seek more musical and sensitive styles. It seems that production needs to be developed more multiple with consideration for music performances and spatial presentation in cooperation with facilities and audiences. As the result, these studies offered a new direction in the way for production.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,800,000	1,140,000	4,940,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：芸術諸学・芸術学・空間演出・音楽興行・感性

1. 研究開始当初の背景

1990年代後半から2000年代中国において

日本人による西洋音楽の全国ツアーが始めて行われた。この興行は外国人として初めて

の行為であり、これをきっかけに中国国内におけるミュージック興行にひとつの方向性が示された。しかしながら著作権等の不備などの問題もあり、日本の音楽業界も中国における明確なノウハウもなくコンテンツ展開も進まない状況であった。

そのような中、興行による音楽・アーティストイメージの創出から音楽コンテンツの活性化を行う動きが始まり、これまで多くのアーティストを創出しその方向を示した。しかしながら、興行での演出の多くは技術者、職人の感性によって創出されたものであり、その技術者の感性に頼らざるを得ない状況である。そのため必ずしも鑑賞者の感性と一致した演出とはかぎらない。また、現地スタッフによる音楽空間演出は、日本もしくは西洋の演出の模倣から始まり、技術的には成熟してきてはいるが、音楽空間と視覚情報の分野を併せ持った演出方法論的なものは示されてはいない。

本研究の基本的考え方として共通する空間認識とその映像表現については本研究が「画面の構成要素に基づく映像制作」（2003年宝塚造形芸術大学研究紀要）と「空間の構成要素に基づく映像制作」（2004年宝塚造形芸術大学研究紀要）がある。このような一連の研究の成果から、2005年、2006年には日本、香港、北京における本研究が参加した音楽興行に部分的ではあるが生かされるようになってきたが、今後中国で更なる音楽興行が進展することを踏まえた上で、更なる演出方法論の構築とその方向性の言及が求められてきている。

2. 研究の目的

近年中国では西洋音楽の演奏会場が数多く建築されている。これまでは小規模な演奏であればホテルのバーなどで併設的に、大規模であればコンサートホールなどで大々的に行われてきた。それが日本における西洋音楽の演奏会場であるライブハウス、クラブが北京市内、上海、シンセンなどに多く見られるようになった。この分野では日本の企業の進出もめざましく、中国国内における西洋音楽の浸透度も年々上昇している。ここでは増加している演奏会場の空間演出について取り上げ、①中国音楽興行の現状とその設備、活用について調査し、空間演出の重要性を実証する。次に②空間における観客の音楽と視覚情報についての関係性について考察を行う。

3. 研究の方法

中国における音楽興行の実態調査を行い、音楽と空間演出の関係性について分析・考察を試みた。調査対象は中国の主要都市（北京・上海など）と日本の音楽興行会場。調査

対象者は中国と日本の若者音楽興行鑑賞者であるが、すべての興行の鑑賞者を調査することは極めて困難が予想された。そこでこれまでの制作研究で本研究者と親交のある音楽プロデューサー、ミュージシャン、中国の大学教員に協力いただきそこでの学生ならびに鑑賞者を調査対象とした。調査計画は、平成21年度に調査対象会場、調査対象者の選定と準備、22年度は調査の実施、23年度は結果の分析、および考察や制作法などについて提言することに充てた。

4. 研究成果

中国におけるロックミュージックの現状について、日中双方の音楽現状に詳しい専門家からヒヤリングを行い、若者への浸透の歴史経過と現地音楽事情を調査、また実地調査によって演奏会場の設備、用法についての現状を明らかにした。具体的な調査内容は以下の通りである。

- ・中国におけるロックミュージックの歴史
- ・興行会社が対象とする北京・上海での会場
- ・ホールなどの大人数収容会場での演出例
- ・ライブハウスなどの現状、設備と演出例

各項目について日本の現状と比較する事により、中国での音楽空間演出の現状と特徴、日本との違いについて明らかにした。

ヒヤリング調査については中国におけるミュージックエンターテインメントの現状(会場の規模、設備、演出に関する内容、方向性)について、以下のメンバーによる会議にて行った。

伊丹谷 良介(ミュージシャン)
太和田 基(NEP プロデューサー 中国プロジェクト)
単 蔚(上海漢亜文化芸術策劃有限公司 プロジェクトマネージャー)
靳 莎莎(騰訊公司 ポータルサイト音楽編集長)
李 而立(アミューズ北京 ディレクター)

実地調査については北京を対象にヒヤリング会議で得た興行会場リストから以下のライブハウスについて、会場の立地、設備と演出例について調査した。

- ・星光現場(The Star Live)北京市東城区
- ・MAO LiveHouse 北京市東城区
- ・愚公移山(YU GONG YI SHAN) 北京市東城区

この調査から日本と比べて大規模な会場は十分備えているが、ライブハウスの数が圧倒的に少なく、効果的に演出されたライブを視聴する機会も限られ、聴衆への演出効果の

意識はまだまだ発展途上である事がわかった。これは国の政策による影響も大きく、現在でもロックミュージックの演出に対する制約も多く存在する。しかしながら市内のCD ショップなどではロック・ポップミュージックの人気は高く、今後も発展することは間違いない。問題をあげるとすれば海外からみて国の政策、習慣の違いからくる制作進行のトラブルが多くあることである。これは急激な進化の過程での副産物ともいえるが、現在は興行における空間デザインの分野が発展している段階であり、大きな需要が見込める分野でもあることが確認できた。

今後の展開として鑑賞者が音楽空間演出においてどのような印象を受けているのか、その音楽との関連性について調査、分析を行い、演出の特性や効果についての検証を行った。

音楽ライブ聴衆ターゲットである20代前後の若者を対象に日本と中国双方の若者を対象にアンケートを行った。

音楽に興味のある宝塚大学東京メディア・コンテンツ学部の学生のうち講義「サウンドデザイン」受講生51名(男性20名女性31名)と中国・北京 MIDI 音楽学院学生55名(男性49名女性6名)を対象に実施した。ここでは音楽に対する基本的な事項と音楽ライブに関する事項を演出・興行を主眼に書面にて質問をした。質問方法は具体的な項目を選択する方式と、設問に対してそう思うか否かを7段階で返答する方式とした。質問内容は以下の通りである。

● 基本的な事項

(項目選択方式)

- ・好きな音楽ジャンル
- ・音楽を楽しむ方法
- ・音楽に費やす1日あたりの時間

(7段階選択方式)

- ・メロディが良い音楽が好きですか？
- ・リズムが良い音楽が好きですか？
- ・歌詞が良い音楽が好きですか？
- ・演奏者の容姿が良い音楽が好きですか？

● 音楽ライブに関する項目

(7段階選択方式)

ライブの良いところ

- ・生の演奏を聴ける
- ・演出を楽しめる
- ・音楽を体感できる
- ・演者と音楽を共有できる
- ・観客と音楽を共有できる
- ・演者のトークが聴ける
- ・演者に会える
- ・大音量で聴ける
- ・グッズが買える

ライブに望むもの

- ・大規模会場
- ・高い音響効果
- ・演奏者の高い技術
- ・映像演出の多用
- ・歌詞の意味を生かす演出
- ・演奏者との距離の近さ
- ・大音量のサウンド
- ・激しく体を動かせる
- ・TV や DVD では味わえない臨場感
- ・限定グッズの販売

この結果、中国における若者へのロックの浸透が進んでいることと、費やす時間は異なるがその視聴方法が日本とほとんど変わらぬ事を確認した。また中国人は大規模会場や高い音響、演奏技術を望み、日本人はTV やDVD には無い体で感じる臨場感を求めるなど、音楽ライブに対する日本人と中国人の嗜好の違いも確認できた。

この調査から社会的にまだロックが浸透していない中国国内において、若者の間では視聴する半数以上がこれまでの歌謡曲からロックミュージック関連に変化している事が確認できた。これはテレビ・ラジオなどのメディアからインターネットへと情報伝達方法の変化が大きく関係すると考えられる。いまだ中国では海外ロックアーティストのテレビ出演には大きな制約があり、若者たちはテレビに頼らずweb上の音楽情報を活用しその音楽を日常に持ち込んでいる。音楽ライブに関する演出については、日本に比べて会場の数が圧倒的に少なく、また大会場でのイベントに注目が集まっている現状がある。国家イベントを除いて効果的に演出されたライブを視聴する機会も限られ、聴衆への演出効果の意識はまだまだ発展途上である。日本のように定着したファンを持つ演奏者も少なく、非日常的な空間を求めに会場に足を運ぶ人も少なくない。そのために音楽的な内容の質よりも派手な演出で興味を引き、観客を満足させることで興行を成立させている面も少なからず存在している。今後中国において音楽ライブがより身近に開催され、鑑賞者の演出に対する要求が洗練され始める事で空間演出表現の分野はより発展していくと考えられる。

映像演出の表現検証では、映像アーティストとともに日本国内数箇所プロジェクト一複数台を用いて抽象的な映像を投射したライトアップを実施したほか、中国上海にて作品展の空間演出を、北京 MIDI 音楽院では音楽とともに映像を用いた演奏プログラムを実施。観客の反応等の結果から空間を構成する映像演出の感性的立証を得た。そのノウハウをもとに北京工人体育館で行われた中国著名アーティストによるコンサートにミ

ュージションサポートとして参加。日中国交正常化 40 周年に向けてイベントを成功させた。

研究実施計画にある研究協力と実施については、東日本大震災の影響で研究室機材の破損、復旧や社会情勢により縮小したが、演出実践や調査分析により日中双方の空間演出に対する需要や方向性を明らかにできたことは、今後の音楽興行に関わる表現分野での方向性を示す良い例となると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計4件)

- ① 渡邊哲意、「ライブハウスでの演出：中国と日本の鑑賞者の意識の違い-中国における音楽興行の空間演出に関する研究その2-」、日本デザイン学会第59回研究発表大会、2012年6月23日、札幌市立大学
- ② 渡邊哲意、「ライブハウス（ハコモノ）での演出：中国と日本の鑑賞者の意識の違い」、道具学会研究フォーラム、2012年1月8日、日本工業大学
- ③ 渡邊哲意、「中国・北京における音楽興行会場の現状-中国における音楽興行の空間演出に関する研究その1-」、日本デザイン学会第57回研究発表大会、2010年7月4日、長野大学
- ④ 渡邊哲意、「北京におけるライブハウス（ハコモノ）の現状」、道具学会研究フォーラム、2010年1月10日、宝塚大学

[その他]

作品発表

- ①長谷川章、渡邊哲意、鳥取・砂の美術館D-K LIVE、2011年12月
- ②伊丹谷良介、渡邊哲意、MIDIゲストライブ、北京・MIDI音楽院、2011年11月
- ③長谷川章、渡邊哲意、京の七夕・二条城D-K LIVE、2011年8月
- ④伊丹谷良介、渡邊哲意、MIDIゲストライブ、北京・MIDI音楽院、2010年10月
- ⑤ミートンイン、渡邊哲意、作品展「花鳥風月」、上海・日本商品館、2010年7月

ホームページ等

- ①渡邊哲意、伊丹谷良介、世界で一番すばらしい旅「台湾のロックシーンを探れ」
http://www.taiwanbesttrip.net/jp/routes/route_10_04.html、2009年8月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 哲意 (WATANABE TETUI)

宝塚大学・東京メディア・コンテンツ学部・准教授

研究者番号：00412073